

京都産業大学

ことばの科学研究センター

2025年度第2回研究会

6月25日(水) 14:00~16:00
4号館2階総合学術研究所会議室

ミツバチとの会話を目指して
—ダンスが語る象徴性と意味伝達の構造—
高橋 純一 (生命科学部・生態系サービス研究センター准教授)

ミツバチの8の字ダンスは、動物界における象徴的コミュニケーションの中でも、最も顕著かつ精緻な事例の一つである。花の位置・距離・方向といった空間情報を巣内の仲間に伝える非音声的かつ視覚的な身体言語であり、そのパターンは「角度 = 方向」「ダンスの持続時間 = 距離」という空間座標の符号化に基づいている。これは、任意の記号と意味を結びつける象徴性という、言語的特性の一端を示している。

本発表では、まずカール・フォン・フリッシュによる古典的実験を紐解き、ダンス行動の構造と情報伝達機能を概観する。続いて、動物間コミュニケーション研究の最新知見を踏まえ、8の字ダンスが人間の自然言語の本質的特徴とどのように重なり合うかを検討する。さらに、近年明らかとなったダンス言語の進化的背景や地域差、振動・音・匂いを組み合わせた複合的コミュニケーションの実態についても紹介し、ミツバチの情報伝達を自然言語の周辺構造として再定位する可能性を示唆する。これらを通じて、動物と人間の「言語」を隔てる境界線を改めて問い直し、相互理解への新たな視座を提示する。

名詞句内の語順選好における統語的・認知的構造化
鈴木 孝明 (ことばの科学研究センター研究員・外国語学部教授)

名詞句内の修飾語(指示詞・数詞・形容詞)の語順に注目し、統語的あるいは意味的構造とその線的順序との対応関係を準同型写像(homomorphism)と捉えて検討する。これは、階層構造をどのような語の並びにするかという「構造と線形化(linearization)」に関する広義のマッピングの問題として位置づけられる。日本語(L1)と英語(L2)に関しては、語順の「自然さ」に関する評価課題を用い、人工言語(L3)については、後置修飾構造をもつ語順の人工文法を学習させ、産出課題によって語順選好を調べた。本発表では、現在分析中のデータを提示し、それにもとづいて統語的あるいは認知的な構造化の原理が働いている可能性について議論する。